

異年齢交流を支えるチーム保育の検討

—指導計画の変容を手がかりとして—

入江礼子・内藤知美・太田佐恵子・井上紀子
杉崎友紀・黒川愛・上田陽子・塩原紀子

A Study on Team teaching which supports Multi-aged grouping Child Care and Education

IRIE Reiko・NAITO Tomomi・OHTA Saeko・INOUE Noriko
SUGIZAKI Yuki・KUROKAWA Ai・UEDA Youko・SIOHARA Noriko

Summary

While conducting a study on team teaching, which supports multi-aged grouping childcare, it became evident to us that 3 things were crucial to it.

1. Every teacher needs a deep understanding of all the children who come to our kindergarten.
2. It is necessary to have the teachers consciously working together, so we have made cooperation among the teachers as one of the objectives in the teaching plan.
3. We must hold study conference of teachers to find out whether there was enough cooperation among the teachers.

キーワード：園内研修、異年齢保育、チーム保育、指導計画

keywords: study conference of teachers, multi-aged grouping child care and education, team teaching, teaching plan

1. 研究の目的

鎌倉女子大学幼稚部（以下幼稚部）では昨年度（2001年度）より保育の見直しを行っている。その初期の目的の一つは「遊びを中心とした保育を展開し、一人ひとりの育ちを理解した環境作りを行う」ことであった。昨年度の紀要ではその実践の第一段階として園内研修と保育実践の変容の問題を取り上げた。そこで明らかになったことは

園内研修における指導計画と保育後記録の重要性であった。その後も幼稚部では引き続き園内研修を軸として保育実践を行っている。

保育の見直しの2年目に入る今年度は特に「人とのかかわる力を育てる」ことに重点をおいて保育を行っている。そのための方策の一つとして「異年齢の交流」に力を入れている。本研究では異年齢交流を支えるチーム保育を目指す実践を指導

計画（週日案）の変容に焦点を当てて検討した。

2. 研究の方法

(1) 対象：鎌倉女子大学幼稚部での保育実践

図1 園児数及び担任数(各年齢1クラス)

	3歳児	4歳児	5歳児
園児数	12	16	27
担任数	1	1	2

(2002年10月現在の数)

(2) 期間：2001年4月～2002年10月

(3) 方法：園内研修議事録と週日案の検討と分析

園内研修は原則として週1回月曜日の保育終了後行っている。メンバーは幼稚部の全職員（部長、次長、主任、クラス担任4名、フリー保育者1名）の計8名である。毎週担任から出される週日案の検討を軸に、担任をはじめとする全メンバーがその時々で取り上げたい話題を中心に話し合い形式で進めた。その内容は議事録という形で記録として残している。

(4) 分析資料

- ①各担任から出された週日案
- ②園内研修議事録
- ③保育後記録（各保育者が記録したもの）

3. 異年齢交流を支えるチーム保育へと向かう 週日案の変遷とその意味

(1) 異年齢交流の実態

①2001年度の実態

幼稚部では従来はクラスを単位とした保育を行っていた。そのため、保育者の声かけがなければ他のクラスと一緒に交わって活動するということはほとんどなかった。保育の見直しを始めた2001年度は、きょうだいが少ない子どもの多い幼稚部の子どもたちの育ちを保障するために保育者は3、4、5歳児が混ざり合って生活できる環境を整えたいという「思い」をもって保育を進めた。しかし従来のクラス別の生活に慣れている5歳児は保育者の声かけによる活動（例えば、手をつないで散歩をするなど、活動の前に保育者が指示した活動）でない場合、3、4歳児と交わることはほと

んどなかった。一方2001年度から幼稚部での生活を始めた子どもたちが多い3、4歳児は、10月初旬から「遊びを自分で選んで活動」する場面で混ざり合って遊ぶ姿が見られるようになった。3、4歳児の混ざり合いが、子どもの育ちに有効であるという話が園内研修でも取り上げられ、その後、保育者が主導の形ではあるが、各保育者が連携をとって5歳児も含めて、みんなでお弁当を食べる活動を作ることも出てきた。

②2002年度1学期の実態

2002年度ははっきりと「異年齢の交流」を保育の柱の一つとした。保育の見直しを始めて2年目ということもあって3、4、5歳児はともに図2に示した流れで一日を過ごすようになった。その中でどのような異年齢の交流が行われたかを1学期の事例「着替えの手伝い」を取り上げてみていく。

図2 2002年10月現在の一日の流れ

9:00	保護者と共に登園する子どもたち及びバスの第1ループの登園終了
9:30	バス第2グループの登園終了 登園後、着替えを済ませたら、自分で選んだ遊びを始める。保育者は指導計画や前日の子どもの姿を考えながら、環境を準備しておく。クラスでの活動をこえて、異年齢で交わる活動も多く展開していく。計画によっては設定保育が入ることもある。
11:00頃	片付け終了。各クラスごとの活動
11:30～12:00頃	お弁当 その後、静かめの遊びを行う
12:50頃	片付けと着替え 図書の貸出（週2回）
13:35頃	帰りの会
13:50	バス第1グループ降園
14:00	保護者と共に降園するグループ降園
14:25	バス第2グループ降園

事例1：「着替えの手伝い」—保育者主導の交流—

3歳児が入園して約1か月半が経った5月末。幼稚部での生活には大分慣れたものの着替えを自分で全てできる子どもはまだほとんどいない。朝の着替えは保護者に手伝って貰っているが、帰りは担任保育者と手の空いている保育者が手伝っていた。一方5歳児のクラスでは年長になったもの

の、まだその自覚がない子どもたちが多い現状があり、担任はその状態を打開したいと考えていた。このことが園内研修で検討され、5歳児がグループに分かれて3歳児のクラスに「着替えお助け隊」として手伝いに入るという活動を始めることになった。

記録1-1 3歳児の担任の保育後記録から (2002年5月21日)

「今日の着替えの時にひまわり組(5歳児)のお手伝いさんが来た。お弁当の時間にちゅーりっぷ組(3歳児)の子どもたちに、ひまわり組が着替えの時間にお手伝いに来てくれることを伝え、とても喜んだ。着替えの時いつもは最後まで逃げ回っているAちゃんもとても早く着替えていたし、「着替えさせて」「先生、やってよ」という男の子たちも素直に応じていた。着替えが思ったよりスムーズにでき、余った時間をどうしようかと困ったくらいだった。ひまわり組のお助け隊は着替えの後、絵本なども読んでくれ、3歳児や先生から感謝されて、とても誇らしげだった。ちゅーりっぷの組の子どもたちもお兄さん・お姉さんがやってくれたことはとても嬉しいことのように思った。このまま続いていくと良いと思う。」

記録1-2 フリー保育者の保育後記録から (2002年6月5日)

「5歳児が3歳児の着替えを手伝い始めてどのくらい経ったろうか。この頃は5歳児も3歳児も楽しみにしている姿が見られるようになった。3歳児からは「私、お姉ちゃんがいいの」「着替えたら本読んでね」、また5歳児からは「今日、Aちゃん着替えたんだよ。」「大変だったでしょ?」(保育者)「そう、汗びっしょりよ。」「3人も着替えさせたのよ」「Rちゃん、かわいいね」等、いろいろな会話が聞かれた。Y男、S男なども年長組にいますときは違うお兄さんの顔を見せてくれる。ごっこ遊びに3歳児が入ってきても寛容に参加させたり、製作のときも作ってあげたり、名前を書いてあげたりと自分でできることを進んで行うようになった。」

歳児の着替えに関わることで担任が着替えを手伝うのとは違う力が働いたことがわかる。3歳児は年長に優しくして貰ったことが嬉しかったり、楽しみにしたりするようになった。また5歳児は年少児に頼られたり喜んでもらえることで自信を持って活動する姿も見られるようになった。さらに6月の幼稚部の親子運動会には5歳児が普段着替えを手伝っている3歳児の名前を呼んで応援している姿もみられた。

事例2:「ショーごっこを通して」

—子ども同士の自然な交わり—

記録2 2002年6月園内研修議事録より

みんなの部屋(3学年共通の部屋)を使ったショーごっこ(セーラムーン劇場)はフリー保育者の支えで5歳児を中心に始まった。それを見た3歳児、4歳児もこの活動に加わり始めた。5歳児は新聞紙を利用したプリーツスカートのコスチュームやスティックを3歳児のために作ってあげた。また自分たちのショーを始める前に第1部として「とっこハム太郎」の歌を歌えるようにプログラムを組むなど3歳児も無理なく入れるように工夫していた。このような場面は保育者から投げかけた活動だけではなく、自由に遊ぶ時間のなかでも3歳児、4歳児、5歳児が混ざって砂場の活動やごっこ遊びをする姿が多く見られるようになった。

(2) チーム保育に向けての週日案の変遷

①週日案I(2001年4月~2002年3月)

2001年度より、子どもの実態と保育者の願い・思いをもとに指導計画を作成し、それを週1回の園内研修で検討している。図3の週日案Iは2001年度いっぱい使われた。この週日案Iの項目は「ねらい」「予想される子どもの姿」「保育者の援助と環境の構成」「環境図と簡単な内容」「週の流れ」「今週の行事」などの具体的なねらいと内容及び環境の構成を含んだものである。

これらの記録からもわかるように、5歳児が3

図3 週日案Ⅰ（2001年度使用）

鎌倉女子大幼稚園指導計画（週日案）

	才児指導計画	月	日から	月	日
ねらい					
予想される子どもの姿		保育者の援助と環境の構成			
環境図と簡単な内容					

時間	月 日	火 日	水 日	木 日	金 日	土 日
今週の行事						
コメント						
立案者					部長印	

○環境図に子どもの位置・活動・関わりを入れる

この週日案には「環境図と簡単な内容」ということで、当初から「環境図」の重要性が考えられてはいた。しかし実際に週日案を作る立場にある担任は、この環境図に固定遊具や道具の位置等は書き込んだものの、活動に必要な道具や、どの子どもがどの場でどんな活動に取り組んでいるかということは記入していなかった。使い始めて3週間が過ぎた4月の末の園内研修（4/27）の折に、この週日案からは個々の子どもの姿があまり読みとれないことが話し合われた。それを受けてこの環境図に子どもたちの予想される位置、活動、関わりを入れることを試みた。このことで子どもの姿をより具体的に浮かび上がらせることができると考えたからである。これで子どもたちが遊びを

主体的に選択する時間に、どの子どもが幼稚園のどの場で活動しているかがクラス担任保育者と担任外の保育者にも視覚的に分かるようになった。その結果、保育実践を行ってみると保育者に子ども理解の深まりがみられ、保育後にも具体的な子どもの話が多く出るようになった。

○「先週の子どもたちのとらえと反省」を入れ込む

しかし、約2ヶ月後、園内研修で週日案を書くことがマンネリ化していることが話し合われた（7/2）。どうしても週日案が「計画」であるため計画を立てるだけでその後の検証が弱くなってしまっているのである。そこで週日案作成時に「予想される子どもの姿」欄に「先週の子どものとらえと反

省」を文章化する努力をすることとなった。

○ティーム保育の必要性

2001年度秋からは3、4歳児はよく混ざって遊ぶようになったが、登園後約1時間の過ごし方が違う5歳児だけは3、4歳児と混ざりあうことが難しかった。また5歳児と3歳、4歳児の間に育ちの違いがあることも話し合われた(10/22)。この状況が異年齢交流の必要性やそれを支えるチーム保育の重要性に気づくきっかけとなった。その第一段階として週日案の検討を今まで以上にしっかり行い、それぞれの保育者が幼稚部全体の動きを知っておく必要に迫られた。

②週日案Ⅱ（2002年4月～6月第2週）

2002年度は昨年度の反省を踏まえて、より見通しを持って活動できるようにということを目標に週日案を一新した。それが週日案Ⅱ（図4）である。項目は「幼児の姿」「週のねらい」「内容」「環境の構成」「環境と見通し」「援助」「反省・記録」「保護者との連携」「他の保育者との連携」とし、別紙（B5版紙）に週の環境図を詳しく書けるようにした。

○週日案と記録を連動させ、環境図を別紙にする

大きな変更点の第1は「反省・記録」という項目を新たに設けたことである。保育実践の反省に

図 4 週日案Ⅱ

週日案 歳児 月第 週 (月 日～ 月 日)

幼児の姿			週のねらい		内容		環境の構成	
日								
環境と見通し								
援助								
反省・記録								
との保護者連携								
との保護者連携								

については保育後記録として別に記録していたが、これを週日案に組み入れたことである。第2に昨年度「保護者との連携」の重要性を感じたこともあって、その項目も入れ込んだ。第3は「他の保育者との連携」欄、で園庭や今年度より「みんなの部屋」という3学年共通で使う保育室での様子を把握するためにも必要ということで新たに加えた。しかし週の初めの園内研修の段階では「反省・記録」欄は空白であり（保育後記録であるため）、「保護者との連携」「他の保育者との連携」欄もほとんど書かれていなかった。保育者間で共通理解を深めるために書式を変えたのだがそれがあまり機能していないことがわかった。6/10の園内研修では、保育者同士の連携がとれていない場面が多いことが話され、声を掛け合って連携をとることなどが話し合われたがこれも週日案がうまく機能

していないのではないためではないかということが挙げられた。

③週日案Ⅲ（2002年6月第3週現在）

週日案Ⅱがうまく機能していないことが明らかになったので、再度改訂版を作ることにした。週日案Ⅲである（図5参照）。

項目は「先週の幼児の姿」「週のねらいと内容」「予想される子どもの姿」「環境の構成と保育者の援助」「環境図（人的環境・物的環境・配慮・子どもの動き）」「他の保育者との連携」「行事及び一日の流れ」とし、保育後記録は「週の記録」ということで別紙に独立させ、今まで独立させていた環境図を再び週日案のなかに組み入れた。

○環境図を組み入れる

環境図を独立させ別紙にしたことで担任保育者

図5 週日案

鎌倉女子大学幼稚部週日案		クラス		2002年 月 日～ 月 日		
先週の幼児の姿			週のねらいと内容			
予想される子どもの姿			環境の構成と保育者の援助		環境図（人的環境・物的環境・配慮・子どもの動き）	
			他の保育者との連携			
	日（月）	日（火）	日（水）	日（木）	日（金）	
行事						
一日の流れ						

はより環境の準備や手だて、どこの場でどの子どもたちが遊んでいるかということを詳しく考えた上で環境図に反映させることができるようになっていった。しかしながら環境図が別紙であるのは他の保育者にとっては見にくいということで再び週日案のなかに環境図を入れることにした。環境図そのものの大きさは小さくなったが、詳しく書くことになった担任保育者は他の保育者にも見やすい環境図を書く力をつけており、週日案Ⅰの頃の環境図に比して格段と詳しく、かつ分かりやすいものになっていた。

○「他の保育者との連携」欄を中心に置く

・異年齢で混ざり合った保育に連動して

この週日案Ⅲの大きな特徴は「他の保育者との連携」欄を紙面のほぼ中心においたことである。週日案Ⅱでも「他の保育者との連携」欄を紙面下にとっておいたが、その上段にある「保護者との連携」欄に押されるかたちでほとんど使用されていなかった。保育者同士の連携が大切であると分かっていても、それが週日案に反映されることはなかったわけである。しかし記録1-2や記録2でも明らかなように、この時期前にもまして異年齢で遊ぶ姿が多くなり始め、保育者間の連携の必要性が高まった。週日案にもこの欄が不可欠と考えたわけである。

・保育者の提案の場としての役割

この欄に書かれる内容は保育者が協力して行わなくてはならない作業の確認や、子どもたちの保育に関して確認しておきたいこと、また共通に使う場所についての提案や確認等が記されている。園内研修の折に口頭で発言するだけでは定着のほど遠かった各保育者からの提案がこうして文章化されただけでしっかりと共通のものとして認識され、特に9月以降の園内研修においてはこのことをきっかけに異年齢で混ざり合っている保育の内容について話し合いが進むことも多く見られるようになった。

○週の記録の回覧

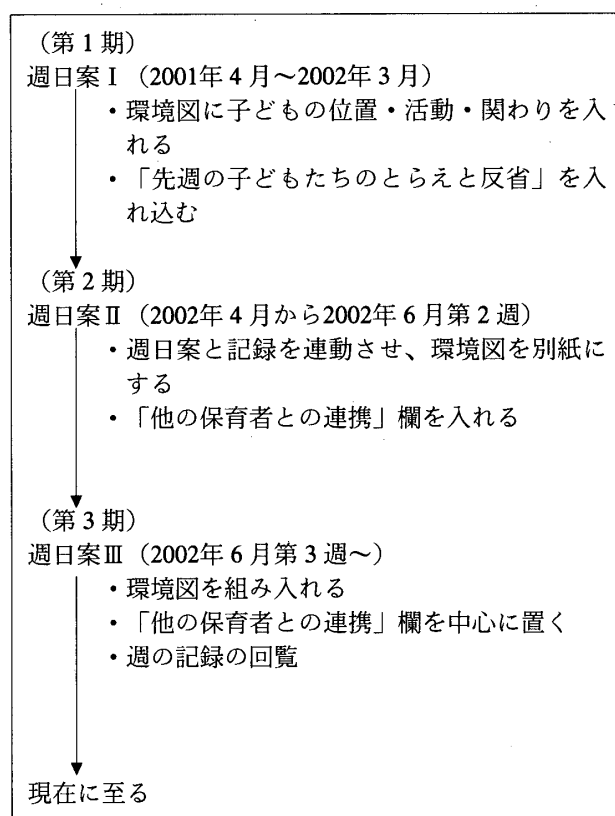
保育後記録を週の記録として独立させ、同じ形式にして回覧することになった。記録の回覧で週日案だけではわかりにくい一人ひとりの子どもの

育ちがそれぞれの保育者の書いた週のコンパクトな記録を読み合うことで理解しやすくなり、担任していない子どもたちへの理解も深まり、それがチーム保育をめざす保育実践にも生きるようになった。

3. まとめと考察

今年度は特に「人とのかかわる力を育てる」ことに重点を置き「異年齢の交流」に力を入れて保育実践を行っている。これを支える指導計画の書式は昨年度も含めたこの1年半で2回改訂された。その改訂内容をまとめたものが(図6)である。

図6 週日案の変遷2001年4月～2002年10月現在



以下、各3期の指導計画の変容から異年齢交流を支えるチーム保育形成の過程を述べる。

(第1期)

保育実践の変容の転回点となったのが「環境図に子どもの位置・活動・関わりを入れた」ことであった。さらに保育実践後の検証をする必要性から、週日案のなかに項目にはなかった「先週の子どもたちのとらえと反省」を入れ込む努力をする

ことで、保育後の反省が指導計画立案の際に重要であることが保育者に意識されるきっかけとなった。さらにこれを深めるために保育後記録を書き始め、それが計画→保育実践→省察→計画の修正→保育実践という連続を生んでいった。このことと並行するように具体的な保育実践の場では子どもたちが年齢を越えて混ざり合って遊ぶようになっていったため、保育者がこの状況を支えるためにチーム保育を行っていく必要性を感じ始めた。

（第2期）

「異年齢の交流」を保育の柱の一つとしたため、園内研修で担任外の子どももふくめて幼稚部全体の子どもをしっかりとらえていくことが大切だと認識され、週日案の形式を大幅に変更した。週日案のなかに保育後記録の項目を作成して計画と記録を連動させることを試みた。しかし実際には記録の部分は保育後に書き込むことになるので、園内研修で週日案を検討する際には、その部分はまだ空白の状態であった。また次週の園内研修で「先週の記録」を検討するだけの時間を捻出することができなかったため、形としては計画・実践・記録（保育の反省を含めた）がありながら、思ったようにはこの週日案が機能しないことがわかった。環境図は別紙として独立させたことで詳しく書けるようにはなったが、園内研修では検討時間ばかりが長くなってそれに見あう保育実践における効果もみられなかった。

第2期では「異年齢の交流」には他の保育者との連携が欠かせないと考え、「他の保育者との連携」欄を週日案の書式の一番下の部分に入れた。しかしながらこの書式を採用してから約2か月間、どの担任保育者も殆ど記入していない。保育者には他の保育者との連携に関して、週日案という保育の計画を立てる段階では、その重要性は意識されておらず、記入されるのは、保育者が意図的に合同の活動を設定した場合のみであった。週日案Ⅱを使い始めて約2か月が経過した頃、子どもたちから年齢を超えた混ざり合いの遊びが生まれ、必然的に保育者間の連携が問われる場面が多く出てくるようになり、それを打開するために再び週

日案の形式を検討することになった。

（第3期）

環境図が、日々の保育実践においては重要であるため別紙として強調した形であったが、週日案に環境図が再度組み込まれる形となった。保育実践の現場では、日々の保育実践や環境の準備に多くの時間を費やすことが必要である。そのため、園内研修の質的深化とともに時間的効率性を挙げていくことも重要な課題となる。第2期で別紙の環境図を通して、具体的子どもの姿を環境とともに理解し、保育に当たる必要性を既に各保育者は認識していたため、環境図は、一枚の週日案に再度組み込まれたが、内容的には深い洞察に基づくものが多くなった。さらに、園内研修においては、一枚にまとまることで、環境図から子どもの動きをイメージしやすく、かつ保育者同士の共通理解も深まる形となった。

子どもたちの遊びが異年齢の交わりを持ち始めた結果、それぞれの保育者の連携なくしては日々の保育にあたれないことが共通理解となった。そのため、「他の保育者との連携」欄を週日案の中心の位置に移動し、かつ量的に増やすこととした。このことは、保育者同士の連携が幼稚部の保育の課題であるという認識を明確化し、チーム保育の基礎が築けたといえる。また園内研修では発言が少ない若手保育者の提案が、この欄に記入されることが多いのが特徴である。

第3期に行なわれた記録の回覧によって、幼稚部全体の子どもの様子が共通理解された。担任は、他の保育者の記録から子どもの理解を深めたり、クラス外の子どもの姿を多くの目でみることで子どもの新たな見方を得る事になり、この記録をクラスの保育に生かすことができるようになった。

4. 今後の課題

以上の異年齢交流を支えるチーム保育を目指す実践を指導計画（週日案）の変容に焦点を当てて検討した。

異年齢交流の実践過程を通して、チーム保育を行なう上での基礎的な事柄として次の3つが実践された。

1. 幼稚部全体の子どもを共通理解する。
2. 意識的な保育者間の連携を指導計画に入れ込む。
3. 保育者間の連携を園内研修で検討する。

しかし、詳細にその実践過程を検討すると次のような課題がみえてくる。例えば、担任の書いた環境図の中に、他のクラスの子どもの記述がない。異年齢交流を支えるためには担任もまた異年齢の子どもたちを保育しているという意識が必要であるが、教材の準備も含めて現在の段階では担任保育者の意識はそこまで達していない。

また他の保育者との連携欄が若手保育者の提案の場として機能するようになってはきたが、園内研修の発言は依然として部長・次長・主任等年長者が中心となっている。チーム保育が、保育者間の自立に支えられていることを考えれば、保育者間の力動性をどう生み出すかが今後の課題となろう。

○脚注

i 入江他 (2002)「園内研修初期段階における保育実践の変容とその諸相—特別に配慮を必要とする子どもへの注目を契機として」鎌倉女子大学紀要第9号2002 p2

ii 入江他 (2002)「園内研修初期段階における保育実践の変容とその諸相—特別に配慮を必要とする子どもへの注目を契機として」鎌倉女子大学紀要第9号2002 p8-p9

○引用文献

i) 入江他 (2002)「園内研修初期段階における保育実践の変容とその諸相—特別に配慮を必要とする子どもへの注目を契機として」鎌倉女子大学紀要第9号2002

○参考文献

i) 長山篤子他「園内研修(1)—園内研修と保育のかかわり—」日本保育学会第53回大会研究論文集 p318-319 2000

ii) 立浪澄子他「保育カリキュラムをつくる」新読書社2000

- iii) 大戸美也子・横浜学園附属元町幼稚園「保育の見直し・1000日の実践記録」フレーベル館1984
- iv) 吉村真理子・菅田英子「園内研修と保育者の成長—松山東雲短期大学附属幼稚園の場合」ミネルヴァ書房1993

要旨

鎌倉女子大学幼稚部では2001年度より保育の見直しを行っている。2001年度はこの第1段階として園内研修と保育実践の変容の問題を取り上げて検討を行った。そこでは園内研修における指導計画と保育後記録の重要性が明らかになった。2002年度も引き続き園内研修を軸として特に異年齢交流を支えるチーム保育を指導計画の変容を手がかりとして検討した。その結果以下の3点が重要であることがわかった。

- (1) 幼稚部全体の子どもを共通理解する
- (2) 意識的な保育者間の連携を指導計画に入れ込む
- (3) 保育者間の連携を園内研修で検討する

(2002. 10. 31. 受稿)